

PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

LETTER

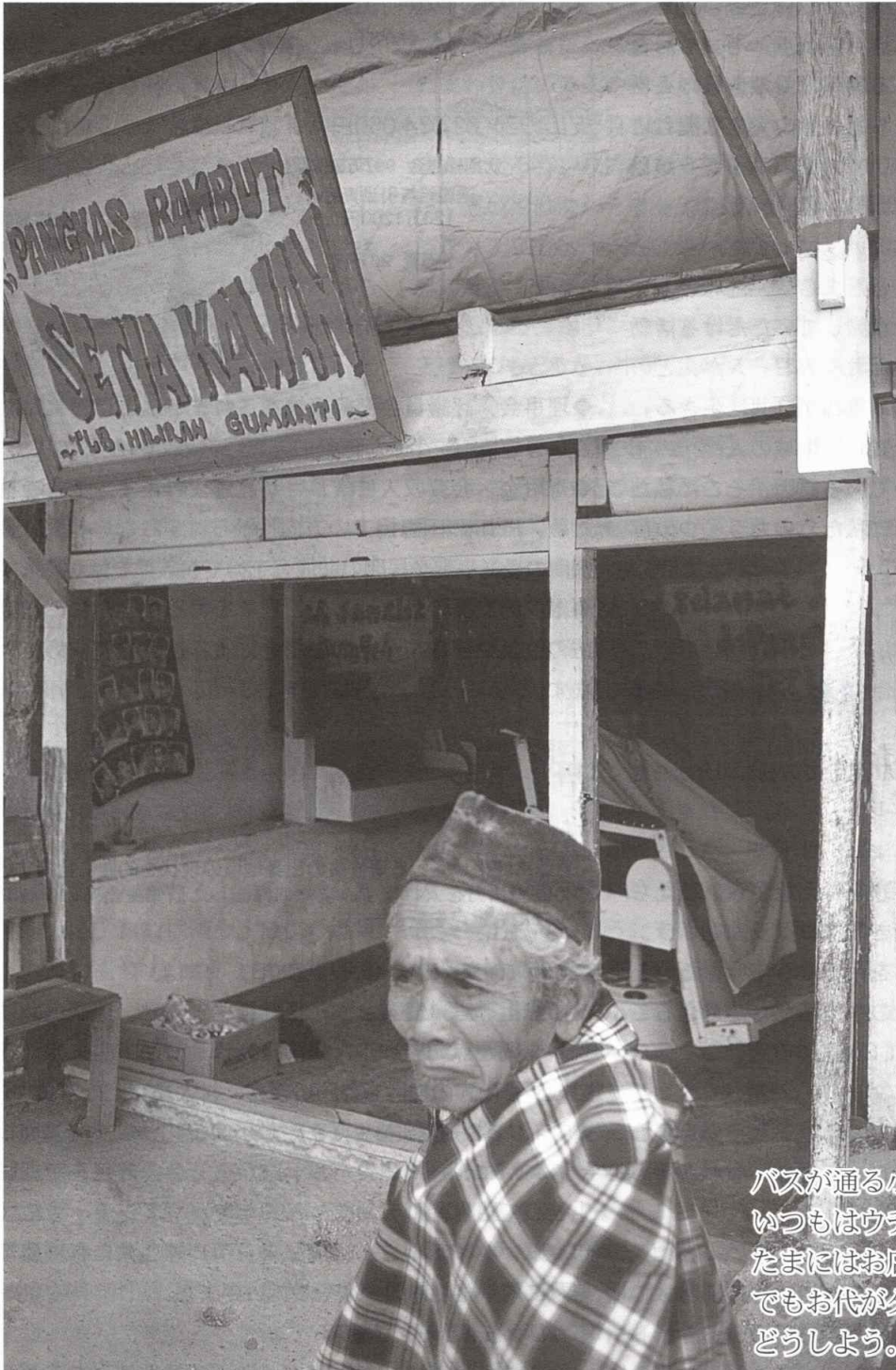
91

2004.6

- 2004年度事業計画 . . . P.2
- 研修生レポート . . . P.4-5
- 私たちが変わるための試み⑤ . . . P.6-7

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり (Peace) 健康づくり (Health) を担う人材をつくる (Human Development) 運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行： 財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人： 藤野 達也
住所： 〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867
E-mail: phd@mb1.kisweb.ne.jp
URL: <http://www.kisweb.ne.jp/phd>
定 価： 100円
郵便振替口座： 財団法人ピー・エイチ・ディー協会
01110-6-29688



バスが通る小さな町の床屋さんの前。
いつもはウチで刈ってもらうけれど
たまにはお店でもらおうか。
でもお代がタバコ一箱とコーヒー一杯分。
どうしよう。

インドネシア、西スマトラ州タランバブンゴ 撮影 FUJINO T.

PHD協会 2004年度事業計画

一人一人の積み重ねから

総主事代行 藤野達也

地球上に住むそれぞれの人が平和で健康に暮らせるように。その実現を担う人を育てることを事業にして、PHD協会は活動を続けてきました。いきなり世界全体では手に余るので、アジア・南太平洋地域とのかかわりからと始めましたが、それでも広い。これまでに10ヵ国まで拡大しましたが、小さな組織の限られた力を有効に考え、最近では対象地域を絞り、そことじっくりお付き合いしています。外からかかわることの良い点、悪い点。モノやお金による関係と人の行き来を重視する関係、対象地域の人々の努力で変えることができる場所と世界の大きな流れに抵抗しなければならぬところ。いくつかのポイントが見えてきます。24年目を迎えて、世界の状況がよくなっているかと聞かれた時に、胸が張れない。逆に、だからこそただ「かわいそう」の国際協力にとどまらず、地球の上に暮らす一人一人の役割の大切さを意識していただける活動にしていきたいと考えます。皆さんお一人お一人が、どのような生活を心がけるか、その積み重ねが「共に生きる」ことであると思います。いわゆる貧しい地域の人々への施しではなく、その状況を生み出している原因、そこに私たちがどう関係しているのか。ここに私たちのもう一つの行動を考えるものとあります。

啓 発

担当 古本妃留美・芳田弓生希

事務局と皆さんとのコミュニケーションを大切にします。また、国際協力と国内課題との関連を意識し、足元での日常的分かち合いにつなげます。

◆プログラム

アジア・南太平洋地域とのつながりを考えながら、私たちの日々の生活を振り返ることのできるプログラムをボランティアの皆さんと一緒に作ることを大切にしていきたいと思っています。そこから日常生活の中で私たちができていることを見つけ、社会の変化につなげていきたいです。

◆広報活動

広報セミナーなどに参加し、そこで学んだことを少しずつ取り入れ、一部、プロの方にも関わってもらいながら進めていきます。ホームページも刷新します。

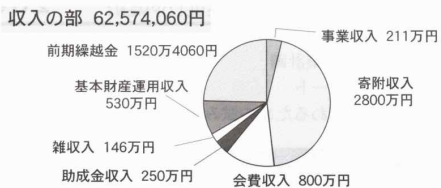
◆物品販売

寄附・会費による収入が厳しい中で、補助的役割として物品販売も行っています。今年は新デザインのTシャツ・トレーナーをプロのデザイナーとやりとりを繰り返しながら作ります。8ページにもありますように、タイカレンの布、Tシャツ等を販売して下さる委託先を増やしていきたいです。

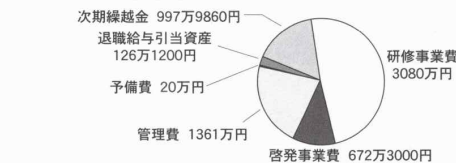
財務・総務

担当 佐々木拓次郎

2004年度予算



支出の部 62,574,060円



- ◆理事会、評議員会との連携をこれまで以上に密にし、ここからの情報を生かし活動の充実をめざしていきます。
- ◆寄附金・会費収入に厳しさが見込まれます。それを補うため、PHDの国際協力の方向性からはずれない範囲で公的機関の受託事業や民間の助成金を得て収入増をはかります。
- ◆継続的支援の必要性へのご理解を得るとともに、送金方法の改良や皆さんからのご紹介による拡大をすすめていきます。

研 修

担当 納堂邦弘・寺田栄

急速に変化している研修生の出身地域の現状を的確に把握するための調査に力を入れます。また、帰国した研修生たちのフォローアップにも重点を置きます。

◆ビルマ調査ツアー（6月12～20日）

研修指導者（農業2人、保健衛生1人）、通訳と共に、現状や問題点を整理し、帰国後の活動に助言します。日本の研修内容の検討を帰国研修生、村人を交えます。

◆フィリピン短期研修生（9月下旬～10月上旬、約3週間）

ヌエバエシーハ州ガバルドンから2名の農民を短期研修生として招き、エディさん（99年度）とアンディさん（03年度）、ハイディさん（現在来日中）等と共に有機農業の普及に取り組む仲間を増やしていきます。

◆カレン布グループ（通年）

昨年に引き続き10月頃にタイ北部の2地域にあるグループを訪問し、村の女性たちによる草木染めの布のデザインや品質、グループとPHDの今後の関係を協議します。



前号で北タイの山村でのコーヒーのお話を予告した。これは日持ちするので、今回は別のテーマで書かせていただくことにした。お話しを。

誰が嬉しい支援なのだろう。

イラクで拘束された日本人をめぐって、いろいろあった。特に二人の市民活動家の行動に対して、すばらしい、けしからんと意見が大きく分かれた。やっていること、対象は異なるが、大きく国際協力という括りで仕事をする一人として、いろいろ考えた。

イラクで苦しんでいる人たちに支援を行うという気持ちは、非難されるものではないだろう。ところが解放条件に自衛隊撤退が求められ、拘束された家族が救出にあたっては政府に自衛隊について強くアピールしたことが、この事件のとらえ方を難しくした大きな理由だろう。自衛隊の派遣については、前号で考えを書いたので、ここではおいておく。

イラクは危険だから、入らないでと政府は言っていた。しかし、それは絶対命令ではなく、拘束された人たち以外にも、入っている民間人はいる。拘束された人たちは、そこが戦場であり、危険は覚悟していただろう。逆にそんなところだから入ろうとする。はじめから捉まる、事故に遭う、政府に助けをもらうつもりではなく、できるだけ騒動にならず、帰ってくるつもりだったのだから。そうでなければ、本来の目的は達成されないわけであるし。しかし、そのための見通し、判断が良かったとは言いがたく、また備えも良かつたはなかったと思われる。そこへの批判には反論の余地は少ないだろう。

政府が外国に居る邦人の保護をすることは、喜んぶすることではないにしても、仕事である。それに対して感謝は必要だろうけど、そんなに詫言なければならぬのだから。

「非政府であるということ。」

「自己責任」が問われているが、危険に身をさらし、ここまでのパッシングを受けることで、今回の行動への責任はかなりのとらされているように思える。

その行動自体が良いか悪いかは誰がどう判断するのか。行動を起こす本人はまず良いと思っている。小泉さんだって、今井君だって。しかしその行動のまわりにいる人や相手の人はどう思うのだろうか。それを含めて判断されるものだろう。政府だから無条件に良い、悪いではなからうし、民間のボランティアの活動やNGOだから良い、悪いとかも簡単には言えない。政府を悪く言って、ボランティアを妙に持ち上げるのもどうか。中身次第だろう。

自分の考えをもつ必要性。

このこともさることながら、今回の出来事をめぐる世論の動きが気になる。毎週でかけている大学で学生と話した。新聞を熱心には読んでない一人の意見は「三人は危険なところに勝手に行って、みんなに迷惑かけて、よろしくない」と。そこで、新聞記事、投書欄、雑誌やインターネットからの識者の文章を賛否両方いくつか読ませて、もう一度尋ねたら意見が変わった。受身で入ってくる情報だけで、あまり考えず、結論を出してしまう。大勢に乗ってしまえば、波風を立てずに過ごせる。先がどうなるかは人まかせ、世の中の動きには興味を持たせないように操作されているのかも思ってしまう。情報がたくさんありすぎてどの情報を選んだら良いのかわからないというのが現在の側面でもある。

イラクの出来事が一段落したところで、今度は小泉訪朝が大きな話題となった。イラクの事件が報道される過程で、政府を責める拘束された家族の態度が非難される対象となった。その後的小泉訪朝では、始めは5人しか戻らないことに対し政府を責める論調一色。ところが被害家族の不満を強調することから、家族に対して抗議や文句が寄せられる展開を生んだ。いろんなとらえ方ができるのは事実であるが、その扱い方がニュースとしてウケるかどうかという点で左右されている傾向が強いように思う。おもしろおかしく伝えることがふさわしい事柄もあるだろうが、出来事が問題を抱えているのならその解決につながる伝え方、知らせ方が優先するのではないだろうか。はっきり方向が示せないのなら、それを慎重に伝えればよい。マスメディアがこの傾向をもつのなら、私たちはそこを理解して接する必要があるように思う。

自分側の意見だけが正しくて、別意見を認めない姿勢が、そこに暮らす人たちの総意を汲んで仕事をすべき政府にあるとすれば、それは困る。そしてその流れをメディアが煽つたらまずかろう。明らかに犯罪的、反社会的なことならいざ知らず、自分と違うからといって、頭ごなしに否定して、責めたてる心の狭さ、ゆとりのなさはいったい何なのだろう。

いろいろな人が集って構成される社会。そこで何が大切なことなのかをそれぞれが考えたい。能動的に情報に接し、自分の考え、意志を持つことが必要な時ではないだろうか。

社会のすべてを政府にまかせておいてうまくいくものでもない。違う視点、異なる発想があるだろう。そこに非政府の立場の意味がある。非だからといって、いつも反対とは限らない。否政府ではない。是々非々。ある時は協働することだってある。草の根の声、市民の声が生かされない社会は窮屈だ。NGO（非政府組織）とはそんな位置づけなのだと思う。

総主事代行 藤野達也

22期生

4月上旬～5月末



日本語の特訓中 (神戸YMCA)

ゾーウィンさん

(ビルマ、男性、34才)

家族構成：父親、兄3人、姉1人、妹1人
言語：ビルマ語
宗教：仏教
研修テーマ：有機農業

マンダレー市近郊イエボ村出身。ビルマ第2の都市マンダレーから車で約1時間、人口は約1,500人です。これまでに隣村から5名の研修生(有機農業、保健衛生、洋裁)を招いており、イエボ村からは3人目になります。

ゾーウィンさんの家では米、豆類、ゴマ、バナナ、マンゴー、パパイヤなどを栽培し、果物類を中国などに売ることによって生計を立てています。親が高齢で働くことができなくなり、兄弟が時々手伝ってはくれますが、主に彼が1人で農作業をしています。村に電気はきていませんが、バッテリーや発電機を利用して使っています。主な交通手段は自転車と牛車です。

「日本の家族」は今までに3人のビルマ人研修生を受け入れていただいてる梶原さん(神戸市)。「前の研修生もそうだったけれど、最初の頃、家を出る時に「いただきます」と言うのが面白かったそうです。



特技の笛を演奏中

4月7日、8日に22期生の3名が無事来日。6週間の日本語研修(神戸YMCA)を終えたばかりですが、かなり上手になりました。5月22日には、交流会が神戸で開かれ、自己紹介やスライドで出身地域の様子を説明することもできました。

ハイディ・マルセロ・マリアーノさん

(フィリピン、女性、24才)

家族構成：両親、兄2人、弟3人、妹3人
言語：タガログ語、英語
宗教：キリスト教(カトリック)
研修テーマ：有機農業、保健衛生

ヌエバエシーハ州ガバルドン、パゴンシカット村出身。マニラからバスとジブニー(乗合バス)を乗り継ぐこと約5時間、人口2,500人程の農村です。この地域には20年以上前から電気がきており、ハイディさんの家にはテレビ、洗濯機、扇風機、アイロンがあります。昨年からは携帯電話が急速に広がって、村人の中にも持っている人がちらほら見られるようになってきました。ハイディさんは家事や家の農業を手伝いながら、この地域で長年活動してきたSAFRUDIによるGBPの活動(右記「21期生報告」参照)にも有給ボランティア

アフリタ(通称リタ)さん

(インドネシア、女性、19才)

家族構成：両親、姉2人、妹3人、弟2人
言語：ミナン語、インドネシア語
宗教：イスラム教
研修テーマ：保健衛生、洋裁

西スマトラ州ソロ郡タバ村出身。州都パダンからバスで3時間、標高約1,100mに位置する総人口約2,500人の山村です。そのため、平均気温が約20℃と年中過ごしやすい気候です。村の違う集落からは99年度以降5名の研修生(有機農業、保健衛生、洋裁)を招いています。

リタさんの家では米や野菜は自給し、唐辛子やサトウキビから作る黒砂糖を売って現金収入を得ていますが、家族が多いため生活は厳しいようです。食生活は米と野菜中心。干魚を週2～3回、鶏肉月1回、牛肉は年1～2回食べる

研修生レポート

(納堂邦弘)

アスタップとして幅広く関わっています。

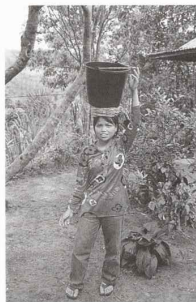
ホストファミリーの河口さん(西宮市)によると、「よく手伝ってくれるので助かります。特にアイロンがけがプロ級。また、パイナップルに塩をかけて食べるのにはビックリしたけどおもしろかった」そうです。



趣味(?)の盆栽
フィリピンでも「bonsai」

という感じですが。

日本では、神戸市内の竹村さんのお宅がメインのホームステイ先。習慣の違いにお互い戸惑うことも多いはずですが、「リタさんが大変素直で明るいので、違和感はないし、とても気持ち良く一緒に生活しています」と話されていました。



山道を片道徒歩15分かけて水汲み

フェアトレードよりも地産地消!

ガバルドンで1979年から村人の生活改善を目指し活動してきたSAFRUDI(サフルディ/PHDのカウンターパートNGO)は、村人のグループにGBP(タガログ語で「新しい希望への導き」という言葉の頭文字)という名前をつけ、保健衛生、手工芸品のフェアトレード、有機農業等の普及を進めてきました。



GBPの事務所
説明してくれるハイディさん

そのGBPが、昨年の1月にSAFRUDIから「独立」。協力関係は続いていますが、プログラムの運営等はメンバーの村人たちだけでやっていくようにな

21期生 フィリピン・比較研修旅行 3月5日～17日

っています。こうして、私たちの受け入れもエディさんやハイディさん、そしてもちろんアンディさんも中心となってスケジュールを組んでくれました。

しかし、形として独立はしたものの、実はGBPの活動はここ数年停滞気味…。というのも、GBPの主な活動の1つであり、大きな収入源であった村の女性たちが作る手工芸品販売が中国やインド等との価格競争に勝てず売れなくなってしまったのです。グローバリゼーションの功罪などについて村人が気付きこも活動の目的の1つとは言え、やはり「収入につながらないとメンバーのモチベーションが下がる」という厳しい現実をエリさんとケンターウエさんは目の当たりにしました。

そこで今、新たな可能性として考えられているのが有機農業グループによる農産物加工。例えば豆腐や豆乳、玉ネギのピクルスなどをフィリピン国内で売っていくというものです。

まさに大森さんの家で行っている自

今年も1年間の研修の総まとめをフィリピンのヌエバエシーハ州ガバルドンで行いました。国内研修生の坂西卓郎さん、農業研修先の長女大森ちえさん(兵庫県和田山町)と共に、約10日間の研修を無事に終えることができました。

給自足の生活に答えがあると学んだ研修生たちは、「グループ作りの大切さ、難しさがよくわかった。農業にしる洋裁にしる、どうやって誰に売ってほしいのかをしっかりと考えないといけないと村の人に伝えたい」等の感想を述べていました。ちえさん自身も「フィリピンに来て初めて自分の家がしていることがすごいことだとわかった」そうで、参加者それぞれにとって有意義な研修となりました。



手工芸品作りを体験

元気にそれぞれの出身地域へ帰っていった21期生。帰国後の頑張りを皆さんにお伝えできるのを楽しみにしています。

研修生は歯がいい!? -その3- (インドネシア・タバ村編)

前号では、村人の砂糖含有食品の摂り方や歯磨きの習慣に見られる問題点について触れましたが、結局のところ「なぜ虫歯になるのか」、「歯磨きは何のためにしているのか」を知らないことが根本的な原因だと言えます。村唯一の看護師さんでさえ、十分な知識を持っていないとのことでした。

子供たちの歯が悪いことの原因には、妊娠中のカルシウム摂取不足も考えられます。子供の歯は妊娠中期頃からすでに形成が始まっており、その時期の母親のカルシウム摂取量が子供の歯の強さに大きく関わっています。

今回の調査を通じて、「最も安くて手に入れやすいタンパク源という」位

置けで村人の多くがかなり頻繁に小魚(イリコ等の干魚)を食べていることがわかりました。このことから、カルシウム含有食品が村に不足しているのではなく、カルシウムそのものやその働きを理解していないことが問題であると言えるでしょう。

例えば、エリさん(03年度)は今まで調理の時わざわざ小魚の頭や骨を取っていたそうです。また、子供(7才・女、4才・女)の歯がほとんど虫歯になってしまっているミミさん(02年度)の場合は、ただ魚があまり好きではなかったため妊娠中もほとんど食べなかったそうです。

<次号に続く>

研修担当のひとり言

「アンディさんと携帯電話」

アンディさんといえば、口数は少なかったが、「反グローバリゼーション」、「遺伝子組み換え反対」などと書かれたTシャツを着て、自分にも他人にもなかなか厳しい人だった。日本の「食」を取り巻く現状、せわしないマチの生活をいつも批判的な眼で捉えていた。

そんな彼を帰国後、完全に「虜」にしたものがあった。携帯電話だ。この1年で村に電波が届くようになり急速に広がったようで、なんと彼の家には村長である父親に支給されたものなど3台もあった。その内1台を手に入れた彼はまさしく「虜」に…。ひっきり

<次項に続く>

なしに着信音が鳴り、メールを書く姿は「どこぞの女子高生かいな」という感じで、日本でのストイックなイメージとのギャップに比較研修旅行参加者一同目を丸くした。

フィリピンに限らず、研修生の出身地域で見られる変化のスピードにはものすごいものがある。「日本が失って

しまった村の良さはそのままに…」という思いと、「不要な機能いっぱいのおべんりな電気製品に囲まれた大量生産・大量消費社会に暮らす日本人がそんなことを言う権利はない」という思いが交錯する。果たしてPHDは、世界を席卷する近代化、グローバル化の流れの中で「共に生きる」社会を実現できる

ののだろうか。大きな津波に向かって犬力キで対抗しているようなものではないのか。

しかし、犬にも意地がある。そういえばアンディさん、犬が大好きだったな。ちなみに彼の愛犬の名前は「ノキア」と「モトローラ」(どちらも大手携帯電話会社名!!) …。

帰国研修生短信 (フィリピン)

エディさん (99年度、マリナオ村)

昨年11月の大洪水でほとんど米が取れず、4男の結婚という出費もかさみ、親戚や村人の農作業を手伝って生計を立てていたそうです。さらに長女が4月に結婚、次男も近いうちに結



おじいちゃんになったエディさん

婚予定とおめでたい話が続くエディさんですが、有機農産物を販売する店作りは「夢」となり、2～3年後の目標にするとのことでした。

ミノさん (96年度、ブグナン村)

有機栽培をしてもあまり高く売れないこと、村人の意識が低いこと、子供が2人高校に行ってお金がかかっていることもあり、なかなか有機農業だけでやれないのが現状です。雨季が始まる6月ぐらいから伝統品種の稲を1種類作る予定。ミノさん所有のエンジンとポンプを使って他の村人の田畑へ水

をくみ上げて流す仕事もしています。

ヨリーさん (93年度短期、ブグナン村)

昨年の12月から体調を崩し、月1回往復6時間もかかる町の病院に行っています。医療費や交通費がかさむ中、村の幼稚園で半日働いていますが給料は安く、農業があまりできなくなって収入が減り、生活が厳しくなっていました。エディさん、アンディさん等と相談した上でPHDから少しサポートすることにしました。はやく良くなって、またミズを使った有機肥料作り等を再開してほしいと願っています。

私たちが変わるための試み ⑤ 「おしゃべりしようよ！」



<メンバー紹介> 写真左から
納屋知子さん：教育に関係する仕事。PHDとは仕事でのつながりも。
浅井裕可里さん：佛教大学4回生、就職活動中。住宅関係我希望。
高橋清史さん：佛教大学4回生、就職活動中。趣味はハイキング。

編：PHDと関わるきっかけは何だったのですか。

高橋：学校のインターンがきっかけ。就職へのキャリアアップと考えていて、動機としてはかなり不純。どんな活動をしているのかさえ知らず、藤野さんにお説教をされ、えらいところに来てしまったと思った。仕事は簡単なものだったが、ボランティアさんとしゃべっている間に、人って面白いなと思

始め、作業するだけでなく話してくれることに温かさを感じた。

浅井：授業でアジアの人々の生活を勉強する機会があり、インターンとしてNGOを選ぶきっかけになった。環境や動物保護にも興味があった。自分で活動をする場を作りたいかった。インターン中は気持ちも行動も精一杯の状態。知らないことばかりで必死だった。

納屋：大学では日本史を勉強していて、平和教育に関心があった。単に過去の事というのではなく、あちこちで紛争が起っている現状で過去の経験を踏まえ、どういうふうに関わりたいのか、そんなことを考えていた。それが大学院では深められないことを感じ、別の道を探していた。そ

今回は大学生の高橋さんと浅井さん、社会人の納屋さんと一緒にそれぞれの思いを語り合いました。

んな時、新聞のPHD職員募集が目にとまった。それが96年の終わりぐらいで、ボランティアから始めることになった。

編：実際に関わってみてどうでしたか。

高橋：林業体験合宿に参加して、私は山が好きなのだが、仕事としてできなくても、都会に住みながらこういう形で山と関われば、山登りとは違う感動を味わえると感じた。いろんなイベントに参加する度に、関わっていききたいという思いが出てきた。研修生との出会いも特別。彼らの村での活動を思った時、自分の中に熱いものを感じた。彼らをずっと前から知っていて、10年後に出会っても垣根がなく話せると思う存在になっていた。

浅井：11月の大阪でのイベントや林業

体験合宿に参加した。インターン中に研修生とも仲良くなったので、話をすることが楽しく、それを目当てに事務所に来た。最初は林業も農業も興味がなかったが、参加してみると興味もわき、どれも学ぶことが多かった。

納屋：いろんなことを教えてもらった。

ボランティアさんとの出会いも大きかった。学生生活は、勉強ばかりでクラブ活動も上下関係が厳しく、人間関係を楽しむことができなかったと思う。それがPHDの事務所では、頭ではなく感覚的に居て気持ちいいというのがあって、それが通わせた原因だった。週2～3回通い、事務作業をしたり、開発教育に興味があったので、他のボランティアさんとワークショップの企画の手伝いをした。西日本研修旅行に同行し、水俣や広島など、普通に自分で行ったのでは分からないことを研修生と一緒に勉強できた。情報収集とネットワークの場でもあり、自分を育ててもらったところでもある。

編：大学生のお二人はインターンが終了し強制ではなくなった、納屋さんは社会人になり状況が変化した。それでも関わりを継続していった理由は何ですか？

納屋：就職してからも自分のポリシーは変わっていない。組織の中に入り歯車の一つになると難しいこともあるが、変えてはいけない部分もあると思う。その変わらない一つの方向性をPHDが示してくれた。今まで知っていた世界観や価値観とは別の価値観や方向性を照らしてくれている感じ。

浅井：PHDに興味があるし、活動を続けたいと気持ちが薄れると思うから。例えば、環境問題に関わることは何かしたい。買物袋持参など日常生活でできることはもちろんだが、それ以上の気持ちを持っていたい。事務所に来ただけでもいいが、それだけだと物足りない。農業や林業のプログラムへの実際の参加することは大切。私の日常では、友だちで環境のことなど気にしている人はいない。そういう意味もある。

納屋：ここに来るとモチベーションを上げられる。

高橋：社会人の方がここに来ているのは、そういうところもあるのか。休みの日くらいゆっくりしていただいたいと思うのに。

納屋：ここで出会う人は大きな意味で仲間って感じがする。衝突するところもあるが、同じ方向を見ている感じがして気が楽。働いているといろんなものと関わらないといけない部分もあるから。

高橋：私は単に面白いから来てしまう。親が自営業で夫婦だけでやっているの、社会をあまり知らないところがある。それが影響し、自分も単純と言うか、世間知らずと言うか。小学校の時、被害妄想かもしれないが、差別も感じた。そういうところから世間を知りたいと思うようになった。アルバイトの運送屋でも、新しいものに対して当たりが厳しいところがある。ここはそういうところがなく、居心地がいい。来ていきなり「よおっ！」て。人間らしいと思ったりする。

編：就職活動中のお二人は、そこにPHDが影響しているところはありますか。

浅井：林業体験合宿で木について学び、住宅に興味を持ち、環境に配慮をした住宅会社を受けている。ここでの経験をもとに仕事も選んでいる部分が多い。

編：これからの自分とPHDの重なり合うイメージってありますか。

納屋：もちろん自分＝PHDではないが、自分のできることでPHDと重なっている部分はあ。今までは開発教育に興味があったが、結婚し家を建て緑も植え、今の自分の状況の中で考えたら、食や林業など改めてPHDはすごいことをしていると思うようになった。人間が生きていくことに関わっている。そのようなイベントに参加したい。これからの私にとってPHDと関わる上で有機農業など食がキーワードになると思

う。農業指導者からお野菜とか買いたい。大阪に住んでいるので、大阪でのイベントは参加しやすい。大阪にいる人間だからこそ行ける、活かせる場がある。仕事からみても関係を持ち続けたい。細く長くてもいいかな。

高橋：僕が生きている上で根本的に変わらないものがある。自分の基本となっているものにPHDが入っている。自分らしく生きるための要素がここにはある。イベントに参加して、時にはバカな話もしました。

浅井：自分らしく生きるには話しを聞いてもらえて、ある程度相手に受け入れてもらうことが大切。

高橋：ここはそれができる場所。いろんな人間がいていい。一つの考えを押しつけようとは思わない。同じものを持っている人の素晴らしさと、違うものを持っている人の素晴らしさがある。そこでお互いに話ができるかどうか。就職活動で忙しく来られない状況は続くと思う。就職したらもっと来られなくなるかもしれない。でもできる限りプログラムには参加したい。特に林業。

浅井：私はここで学んだことが自分のベースになっている。それはプログラムを通じて学んだPHDの理念や考え方、職員の思い。これからも、いろんなプログラムに参加したい。同年代もいれば、違う年代の人もいる。研修生もいろいろ。みんながいろんな価値観の中にいる。ここに関わるたびに、今日も来てよかったって思う。これからもそういう関わりをしたい。自分が成長できるためのものがここにはある。

PHDと関わることにより変化していく自分に気づく人、自分が大切にしていることを確認する人。こういう人たちにPHDも影響を受け、変えられている。お互いに。こういう世の中だからこそおしゃべりすること、つながることを大切にする。研修生、ボランティア、職員、いろんな人が集い、いろんな価値観の中にいることを心地良いと感じる。お互いの考えや思い、経験を共有する。そういう場がたくさんあれば、PHDがそういう場になれば…。

地元でお仲間と

～ 委託販売のお願い ～

地域のバザーや学校の文化祭など皆さんの身近で行われるイベントで委託販売をしていただける方を募集しています。PHDグッズを通して楽しみながら当会の活動についてたくさんの方に広めてください。また、タイ・カレン布が、生産者や日々のお買い物について考えるきっかけになればうれしいです。「もっと知りたい!」という方のために、スタッフが皆さんの町に出かけて行き、村の生活や布グループについてお話しします。



PHDグッズの紹介

Tシャツ



この夏新しいデザインデビュー。ヒットの予感!

ポストカード



村を訪れ出会った子どもたちの豊かな表情。和みます。

タイ・カレン布



カレンのおばちゃんを通して見てくることは深いです。

アジア小物



タイの箸やアクセサリなどいろいろあります。

お問い合わせは古本まで。随時受けつけています。秋に向けてイベント参加の計画などありませんか～。

PHD NEWS

◆会費・ご寄附寄託状況

| | | |
|----------|------|------------|
| 2004年 2月 | 121件 | 2,253,965円 |
| 3月 | 139件 | 1,928,556円 |
| 4月 | 105件 | 778,080円 |
| | 365件 | 4,960,601円 |

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附をいただきました。ご浄財に心より感謝します。今年も会費納入お願いの時期となりました。引続き皆様からのご支援をお願い申し上げます。

◆理事会の役員重任

5月14日開催の第54回理事会において、役員改選が行われ、9名の役員が重任となりました。新理事会は次の通り。理事長・今井鎮雄、理事・岩村昇、金光清行、神木董、西田裕、森滋郎、森本章夫、米谷収、監事・齋藤貢。

◆林業体験一山へ行きましょう!

もちろん、今年も行います。只今ボランティアスタッフと共に夏と秋のプログラムを企画中です。決まり次第ホームページ等でお知らせします。日本

林業の衰退は以前からお伝えしていますが、山や森林が荒れていくことは私たち自身の生活が脅かされることを意味します。普段の生活では見えない、けれど大切な山と私たちのつながりについて一緒に考えてみませんか。お問い合わせは、寺田まで。

第9期国内研修生募集

国内でも平和と健康を担う人材を育成しようと95年より実施している国内研修生制度。今年も1名募集します。募集要項をお送りいたしますので、お問い合わせください。

内容：PHD協会の事業を通じた実施研修

- 1) 海外研修生の研修事業を軸とする実践
 - 2) 国際理解・開発教育など国内に向けた啓発活動
 - 3) 公益法人における組織運営
- 対象：日本国内居住者、日本語でのやり取りが可能で、将来、開発協力・教育・福祉などの分野で働くことを志し、当会事務所に通える方

研修日程：10月より6ヵ月間（週3～5日）

1月に国内、3月にフィリピンへの研修旅行あり

時間：原則午前9時～午後6時

支給経費：研修手当及び交通費

選考：書類審査後、筆記・面接（8月17～20日を予定）

募集締切：7月31日（土）必着

○月×日のPHD協会

研修生アフリタ 西スマトラ伝統舞踊が舞える。部屋ごしに練習の音だけ聞いてた滞在家庭のお母さんが「イスラムのお祈りの儀式の音」かと勘違い。

職員 芳田 ひそかに空手の練習を始める。これ以上強くなってどうすると畏れる他職員をヨソに週一通う。タイ出張時にムエタイと異種格闘技戦か。

職員 寺田 じんましんで病院へ。2時間待って3分診察。注射が効きおさまる。原因の心当たりは隣に座る納堂職員からの伝染。研修担当の絆は強い。

研修生ゾーウィン 久しぶりに芸達者の研修生。数種の笛を吹きこなす。ビルマでは一時期、これで飯を食ったとか。2本のタテ笛同時吹きは必見。

職員 藤野 年相応の白髪のもりが家庭で娘の評判悪く、強制的に着色を受ける。3年前のネパールでのヘナ以来。職場の評判は微妙。

研修生ハイディ 今のところ目立った芸はなし。うわさではカラオケ好きとか。西宮の滞在家庭のお父さんは研修外で一つ芸を持たせて帰りたいと意欲。

職員 古本 最近お引越し。家賃はアップ。おしゃれな町並みのどのお店の何がおいしいか、調べ済。ただし実際の味見がまだ。お土産付きでお立寄を。

職員 佐々木 健康管理のため食生活改善に取り組む。王将、天一を減らし自炊を心がける。得意技は玉ねぎ炒め、大根おろし入り納豆、スライストマト。

職員 納堂 フィリピン出張時にお連れ合いご出産で父親に。研修生に組んでいた育児や離乳食の研修が自分にも必要に。今年は仕事により身が入る!?

以上、声大きい順